

洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内

洛友会

〒606-8501

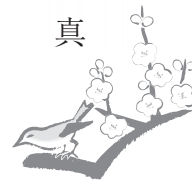
京都市左京区吉田本町

075-753-5270

www.rakuyukai.org

人工知能の脅威

洛友会会長 長尾 真



新年あけましておめでとうござ
います。

洛友会の皆様には、つつがなく
希望をもって新年をお迎えになっ
たこととお慶び申し上げます。

私、昨年傘寿の年を迎え、いろ
んなグループの方々から祝ってい
ただき恐縮いたしました。数年前

には必要になるだろうとステッキ
を頂いたり、これからはガラケー

はなくなつてゆくからといってス
マホをもらつたりしました。携帯

はこちらから電話を掛けるとき
と、今も東京へは月に4、5回行つ

ておりますので、新幹線の切符を
予約するために必要ということ
使ってきましたが、スマホだと
なんでもできるからということ
もなりました。しかし電話と新
幹線の予約にしか使わず、しか
もこちらが使うとき以外は電源
を切っていますので、もったい
ないことです。仕事の第1線に
いる若い皆さんには必需品なの
でしょうが、

つついネットワーク上の情報
をみたり、しなくてもよいこと
をしながら、必要な情報は
必要でしょう。

韓国の囲碁の名人がコンピ
ュータに負けたというニュース
があつてから、人工知能の持
つ力への認識、あるいは恐怖
が広まってきました。私はこ
れまで50年間コンピュータ

ンピュータによる言語の翻訳
の研究をしてきて、高校生か
大学の初年度で来たと思つて
いたのですが、京都大学情報
科学研究科の黒橋慎夫教授
らの研究によると、最近の
人工知能を使った機械翻訳
では一挙に翻訳の質が上がり
、うっかりすると大学生も
勝てないと思われるところ
まで来ました。このような
人工知能の発展を見ている
と、その能力に感心するとい
うよりは、このようなシステ
ムを考えるとすごい頭脳の
持ち主がいるということに
感心させられます。

このような人工知能が今後
どのように社会の隅々まで
取り入れられてゆかによつ
て、10年、20年先の社会
は抜本的に変わる可能性
があるでしょう。技術の進
展によつて工場労働の多く
が自動化されたのは数十年
前のことですが、単純労働
だけでなくホワイトカラー
の仕事の多くも人工知能
にとつかわられる可能性
が非常に高いと言わざる
を得ません。人工知能が
社会をよくする方向だけに
使われることを念じる以外
にありません。悪用され
ると恐ろしいことになる
でしょう。

最後に人工知能では書け
ないであろう文章を次に
つけて、新年のご挨拶と
いたします。

私の宝ヶ池

私は宝ヶ池プリンスホテルの裏
に住んでいますので毎日の散歩
道に事欠きません。近くには小
高い山に鎮座する幡枝神社が
あり、長代川筋も気持ちよく
歩けます。しかしなんといた
つても宝ヶ池を一周する小
径は散策にとつては最良の
場所です。一周1・5km、家
から出て一周して帰ってく
ると約45分で、ちょうど良
い運動です。

池の周りから見ると風景は
変化に富んでいます。ある場
所からは東山魁夷がきつと喜
んで画くに違いないと思わ
れるような緑いっぱいの立
木が水面に映つて見え、付
近の静寂を支配しています。
また別の場所から見れば、
池と国際会議場を前景とし
て悠然とした比叡山が見え
、菊のころは陶淵明の有名
な句を連想させますが、山
の形をよく見ていると、サ
ントビクトワール山をいろ
いろと絵にしたセザンヌが
観たらどのように表現する
だろうかとも思われ、一人
で空想を楽しんでおります。

そういえばコロやバルビ
ゾン派の人達も画架を立て
るのではなく、いかと思わ
れる場所や小道もあり、日
本の風景であるとはいえ、
日本画よりは洋画の方にマ
ッチした場所かなと思われ
るのは少し不思議な感じが
します。きつと雪舟

迎春

二〇一七年一月一日

本部役員

顧問 問木村 磐根
会長 長尾 真
副会長 安田 豊

支部長

小野寺 秀俊

関西 駒谷 喜代俊

東京 小森 光修

中部 安藤 和史

中国 松井 三生

四国 山地 幸司

九州 深堀 慶憲

北陸 葛原 正明

東北 井上 茂

北海道 澤井 秀

本部幹事

荒木 光彦

佐藤 亨

高岡 義寛

藤田 静雄

守倉 正博

和田 修己

の絵巻物や南宋の水墨画のような広々とした視野がここにはないからかもしれません。

霧がかかったり、雨の中の宝ヶ池も幻想的雰囲気漂わせますし、日が妙法の山に没するとき、また名月の時の景色は言葉では言い表せません。朝早く太陽の昇る前の茜色の雲がたなびくさまなどは枕草子の冒頭の有名な文章を想起させ、平安時代の人々はどういう環境の中で自然を友としてゆつくりと生きていたのかと羨ましがられます。

このあたりも徐々に住宅地となってきましたが、今もせつせと畑を耕し京野菜を作っておられる人々の姿もあり、子供のころの田舎を思い出させてくれます。種蒔きをしていたなと思うと、すぐに二葉が出てきて、あっという間に大きくなってゆく野菜の成長力、自然の力にはいつも驚かされます。

岩倉は私に、自然と人生を与えてくれるところであり、感謝しております。

教室だより

平成28年度電気系教室

懇話会報告

平成28年度電気系懇話会が教員、学生、ならびに卒業生他約90名の参加を得て、11月11日(金)に、電気総合館大講義室で開催された。工学研究科電子工学専攻長の山田啓文教授が司会を務められ、講演会に先立って電気電子工学科長の守倉正博教授が懇話会の趣旨等に関する挨拶をされた。その後講師にお招きした、牟田一彌名誉教授、松ヶ谷篤史氏(平17年卒)、千原邦義氏(昭54年卒)のお三方により、非常に興味深い講演を頂いた。ご講演の概要は以下の通りである。

「超電導応用技術の進展」

牟田 一彌 名誉教授



牟田先生が長年取り組まれた超電導応用技術に関してご講演を頂いた。ご講演は二部構成で、第一

部では「Episode: 江戸幕末〜明治時代の電気通信技術黎明期」と題され、牟田先生の出身地である佐賀での、幕末からの電気通信技術に関する紹介があった。幕末の佐賀藩から明治時代にかけての反射炉、精煉方、三重津海軍所といった施設、東芝の創業者でもある田中久重ら多彩な人物に関して説明された。

第二部では、まず超電導現象の特徴に関して、電気抵抗ゼロを表す完全導電性、磁束が超電導体に入り込まないマイスナー効果と呼ばれる完全反磁性が紹介された。ついで、超電導関連の科学技術史について紹介があった。2016年のノーベル物理学賞も、超電導をはじめとした現象のメカニズムを、トポロジ(位相幾何学)を用いて解き明かした業績に対して贈られているとのことであった。

さらに、具体的な応用技術について紹介があった。金属系超電導体に関しては、発電機の開発は各国で行われたが、連携試験まで完了したのは牟田先生が関与された日本のNEDO-Projectだけのことであった。リニア新幹線でも金属系超電導線が用いられており、核融合炉においても高磁場の発生のために超電導マグネットコイルが必要とのことであった。また、MRI(磁気共鳴映像法)の解像

度強化に必要な磁場強化のために超電導マグネットの研究開発が進められており、実用にもなっているとのことであった。

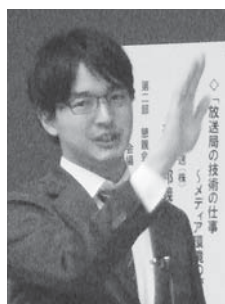
酸化物系超電導体に関しては、船舶の推進用モータが各社により開発されており、コンパクトにできるとのことであった。水力発電にも既に使用例があるほか、損失なく大容量送電が可能な直流送電ケーブルに加え、今後の応用として、最近研究が盛んなものとして、電気航空機用モータが紹介された。

最後に、地球温暖化の解決策や、成長戦略としてのイノベーションを引き起こす有望な技術の一つとして超電導技術があるとのメッセージを頂いた。

「KDDIにおけるネットワークの高度化と品質向上への取り組み」

松ヶ谷篤史 氏

(KDDI(株))



いまや我々の日常生活を支える基盤となっている通信ネットワークに関する現在までの取り組みと

迎春
二〇一七年一月一日

京都大学

電気関係教室

教員一同

銚子 S C C

代表取締役社長 松尾 泰

宇宙技術開発 銚子

代表取締役社長 松尾 泰

電子開発学園
北海道情報大学

理事長 松尾 泰

迎春
二〇一七年一月一日

今後についてわかりやすくご講演いただいた。

まず、スマートフォンの利用等によりデータ通信量がどんどん増加する中、基盤整備の中で重要な位置を占めるLTEネットワークの高度化の取り組みについてご紹介いただいた。LTEネットワークは2012年9月に75Mbpsの通信速度でのサービスが開始され、その後さまざまな技術を用いて通信速度の向上が行われている。最初は帯域幅を広げることで速度の改善が行われていたが、それだけでは過密地域で容量が不足することになり、複数の異なる周波数帯を同時に利用する技術であるキャリアアグリゲーションにより通信の高速化・安定化が図られ、2015年10月には300Mbpsでの通信が行われるようになった。また、WiMAXでも同様の通信速度向上が行われ、現在はLTEとWiMAXの回線を同時に利用することで370Mbpsを実現しているそうである。このことにより、譲り合いによる帯域の有効利用と混雑回避が行われている。さらに、過密地域でも通信回線が不足しないように、意図的にカバーできる範囲が狭くなる高周波(3.5GHz)帯を利用することで干渉を起こさずに基地局の数を増やし、混雑を回避すると

いったエリア構築手法についてもご紹介いただいた。

次に、ネットワーク品質向上の取り組みとして、エリア拡大、通信品質向上、イベント対策、災害対策に関する取り組みをご紹介いただいた。通信はあらゆる場面で使えることが普通になり、利用できないことがストレスとなってしまうことから、基盤整備に大きな労力が費やされている現状をご紹介いただいた。現在auは人口カバー率99%となっているが、あらゆる場所で行われるようにエリア拡大が続けられている。世界遺産である知床や屋久島のようなアンテナをエリア内に立てられないところでもエリア外に立てたアンテナで通信可能となるように工夫して設置を行っているそうである。また、イベントの際には車載基地局やWi-Fi基地局となる人を配置するなどにより、通信の集中に対応している。さらに、災害時には太陽光発電による基地局や衛星を利用した回線、車載や船舶の基地局を配備するとともに、避難所に無料のWi-Fiを用意するなど、通信基盤を提供する会社としての社会的責任を果たす取り組みが行われているとのことであった。

術、自動運転などにおける通信のように遅れが許容できない場合のDevice to Device通信や用途に応じた経路の動的な最適化などの技術開発、民間による月面探査を目指すHAKUTOへの技術提供など、将来に必要とされる技術やその用途についてご紹介いただいた。

質疑の際には、通信基盤整備とコストの関係に関する質問があったが、コストよりもあらゆる通信が快適に行われる環境を整えることを重視する方針で整備が進められているということで、単に通信基盤を提供するだけではなく、社会的責任を強く意識されていることを感じるご講演であった。

「放送局の技術の仕事」
メディア環境の変化と対応
千原 邦義 氏
(朝日放送(株))



要(地デジ・ラジオ・CS放送)と経営理念、ABCテレビ(地デジ)の系列局と制作番組についての紹介に続いて、入社以来関わって来られた仕事と、それにまつわるエピソードをお話し頂いた。

1994年に制作技術部の報道中継担当へ異動されてすぐに阪神大震災が発生したため、中継車に乗り込んで渋滞の中を8時間かけて神戸へ向かい、現場からの中継を担当されたとのことであった。その後、オウム真理教の地下鉄サリン事件などの報道も経験され、異動当初は報道中継の仕事はあまり好きではなかったらしいが、だんだん面白いと思えるようになってきたとのことであった。その後、ゴルフ中継などの大規模中継の担当に戻られたが、ゴルフ中継におけるカメラの配置を決めるにも、ゴルフをよく知っておく必要があるため、ご自身もゴルフが少しでもうまくなるよう努力されていたとのことであった。

次に、放送局での設備紹介とあわせ、実際にスタジオやロケで録られた映像が最終的に電波に乗るまでにどのような経路を辿るか、分かりやすく説明して下さいました。スタジオ収録や中継車、ヘリ等による中継映像はマスターコントロールルームを経て生駒山にある送信所から送信され、中継基地も活用して2府4県のエリアへと送信されているとのことだった。また、放送局の収益にとって重要な営業放送システム(CMや番組編成、売上などを一元管理するシステム)についても紹介があった。

さらに、甲子園球場で行われる、夏の高校野球全国大会にまつわる話をして下さった。同大会は、

迎春
二〇一七年一月一日

公益財団法人

京都技術科学センター

(旧財団法人近畿地方発明センター)

理事長 宇山 親雄

公益財団法人

応用科学研究所

鐵田中プリント

A B C テレビ・ラジオだけでなく、BSやCS、さらにはインターネットでも中継が行われるらしく、野球の臨場感、面白さを伝えるため、実に様々な人が関わっている様子を、甲子園中継の裏側を紹介するテレビ番組の映像を用いて、とても分かりやすく紹介して頂いた。

最後に、昨今の放送をとりまく環境の変化、とくにインターネットの普及と放送の高度化への対応について説明があった。スマートフォンやタブレット端末の普及により、インターネットでの動画配信に期待が高まっており、朝日放送でもT V e rをはじめ、さまざまな番組配信サービスを通じて制作番組を配信していること、バーチャル高校野球というインターネット上のサイトでは様々な情報を交えて高校野球のライブ中継を行っていることなどを紹介頂いた。また、現在の地デジ放送(2K)のおよそ4倍・8倍の画素数を有する4K・8Kと呼ばれる映像規格の概要と、4K番組の制作・放送状況について説明があった。

なお、千原様は昭和54年に木村磐根先生の研究室をご卒業されており、電気電子学科長の守倉正博教授と同期だったとのこと、懇親会では木村先生、守倉教授と旧交を温めておられた。

講演会終了後、北部キャンパス生協食堂2Fで100名以上が参加して懇親会が開催された。司会には工学研究科電気工学専攻長の土居伸二教授が務められた。木村磐根洛友会顧問にご挨拶頂き、合わせて乾杯の挨拶とご発声を頂いた。途中、西台惇氏(昭32年卒)にご先導いただきながら、洛友会の歌を皆で合唱した。その後、中締めとして小野寺秀俊教授からのご挨拶を頂き、その後名残を惜しみつつも、時間の関係で解散した。



会員寄稿

ソフトウェア人材育成について思うこと

前川 隆昭

(昭54年卒・関西支部)



人材育成の重要性はますます増大しており、企業内でも様々な取り組みがなされています。そうした事例の一つとして、定年を迎えた私がこれまでやってきた人材育成について思うことをお伝えしたいと思います。

私は、桑原研で医用画像処理の研究を行って、1981年に修士課程を修了しました。同年に入社した三菱電機の研究所では、画像処理や計測制御のソフトウェア開発に従事し、工業・産業分野の監視制御システムの応用研究やシステム開発を行っていました。その後重電システムを開発する製作所や米国勤務などを経て、最終的に人材開発センターで2016年の3月に定年を迎えました。定年後

も専門嘱託として人材育成に取り組んでいます。本稿では、現役時代から携わってきた三菱電機のソフトウェア人材育成についてお話ししたいと思います。

三菱電機の人材開発センターは「教室」という組織があり、私が所属する情報・ソフトウェア教室の他、機械教室や電気教室、さらにはビジネス教室や営業教室など、技術にとどまらない全社の人材開発に責任を負う体制になっています。各教室は、グローバルで13万人を超える三菱電機グループの人材開発の計画立案・施策実行を行っています。

我々情報・ソフトウェア教室は、若手からベテランまでのソフトウェア技術者を対象に、基礎的な技術講座からリーダー教育まで幅広い人材育成体系を持っています。入社すぐの新人教育や2・5年目のエントリ層教育は全員教育を目指し、それ以降はキャリアに応じた教育プログラムを提供しています。そして、30代後半から40代のリーダーを目指す技術者には、選抜型のリーダー育成コースを実施しています。

我々情報・ソフトウェア教室は、「ソフトウェア技術者の地位向上」をミッションに掲げ、「あきらめないプロ意識を持ち、世界に誇れる一流の技術力があり、夢と希望

を持つソフトウェア開発を主導し、若い人にソフトウェア開発への希望を与え、皆を導くリーダーシップが発揮できる『理想のソフトウェア技術者』の育成を目指す」というビジョンを持っています。

このミッション・ビジョンを実現するために、私は「心・技・体」の3つの軸を大切に思っています。以下では、私の所属する教室の仲間とともに築き上げてきた、この3つの軸に沿った人材育成施策をご紹介します。

最初の「心」の軸は、「Changes for the Better」の精神の徹底です。三菱電機のコーポレートステートメントの「Changes for the Better」は、額縁に飾っておく単なるスローガンではなく、絶え間ない変革を自発的に行っていくと社員全員の決意表明でもあります。ソフトウェア技術者は、一般的にはこのような改善活動には無頓着です。そこで、講座の中で折に触れてその精神を確認するとともに、ソフトウェアの改善活動や社内事例発表会などの具体策を通じて定着するようにしています。

次の「技」の軸は教育の方法論で、これは技術教育とマインド教育の融合です。技術教育にはできるだけ社員が講師を務めるようにしています。これにより、ベテラ

ン技術者からの技術伝承を図るとともに、ベテラン自身も教えることによって学ぶ機会を得ます。私自身もこれまでの経験を踏まえて、ソフトウェア工学やプロジェクトマネジメントの講師を務めています。またマインド教育には、ビジネス書でベストセラーになった「7つの習慣」の社内教育ライセンスを私も取得し、社内教育に展開しています。こうして、技術とマインド両輪の人材育成策を通じて、先に掲げた理想の技術者像を育む努力をしています。

3つ目の「体」の軸は講座の中での体験です。各種の講座では座学での技法・手法の習得に加え、グループ討議やケーススタディーなどの演習により学んだことをすぐに応用する実践的な講座構成を取っています。また、受講生は様々な製品を開発している多様な分野から集まっており、自分たちの技術課題や職場の問題を共有して多彩でオープンな議論ができる場を提供しています。

私は定年を迎えましたが、人材育成への想いはまだまだ現役です。「心・技・体」の3つの軸を自分の行動規範の中心において、ソフトウェア技術者の地位向上に向けて今後も励みたいと思っています。

フルマラソン

中田 和男

(昭63年卒・北陸支部)

まさか、自分がフルマラソンを走ろうになるとは夢にも思っ

きつかけは、もう5年以上前になるが、いきつけの床屋さんをして

その頃、徐々に中年太りが進行し、体重は増加の一途をたどって

いつものように床屋さんにいき、髪を切ってもらっている間のたわ

うですか?という問いかけであつた。いろいろ話を伺うと、このご

このご夫婦の話に触発され、気

が付けば、次の週末くらいには走り始めていた。ただ、最初のころは、5年後くらいにはフルマラソンを

走り始めて3ヶ月後、会社の健康診断があり、体重を測ったらなんと3kgも減少し、73kgとなつて

（最終的には69kgまで減少）。その他にも太ももの裏側の筋肉（ハム

このような成果を実感できると、人間はそれほど苦もなく継続

めげず走り続け、走り始めてから約1年後に、とうとう初めての

かげろうが立つくらいに暑さで、

ランナ初心者にはあまりに過酷なコンディションであつた。レース後半は、暑さと疲れとの闘いで意識朦朧、ヘロヘロになりながらも、

しかし、ゴール直後は精根尽き果て、もう絶対レースにはでない!と固く心に誓った・・・はずであつた。

その後、いくつかのハーフマラソンを経て、走り始めてから2年弱、とうとう初めてのフルマラソンとなる地元石川県は和倉温泉を

上り、もう走るのを止めたい、という弱気な自分と、今やめたら二度と走り出せないぞ、という意地っ

それでも意地っ張りの方が勝ったことによりゴールまでたどり着くことができ、タイムも目標にしていた4時間以内の3時間55分を

よく、ゴール直後に感激のあまり泣き出す人や万歳をする人を見

たりもするが、自分の場合は、うれしいという感情は全くなく、もう走らなくてもいい」という苦痛から解放された安ど感があるのみであつたことを鮮明に記憶している。

これほどまでに苦しいはずのフルマラソンであるが、既に6回も出場し、タイムも3時間39分まで伸ばすに至っている。

なぜ、ここまでして走るのか疑問を持つ方も多いと思うが、やはり走ることで、レースにすることが楽しいのである。2000年のシドニーオリンピックの女子マラソンで金メダルに輝いた高橋尚子さんは、レース後のインタビューで

「とても楽しい42kmでした」と述べていた。その頃は、なぜ走っていただけのマラソンが楽しいのか、ただ苦しいだけではないか、と思っていたが、今はその理由がよくわかる。

第一に、走っていると気持ちがい。確かに30km以降は苦しいが、少なくとも20kmくらいまではかなり余裕を持って走っており、とても爽快なのである。更にレース本番では、沿道の応援があり、これによって体中からアドレナリンが

マラソン選手がレース後のインタビューで、沿道の声援が力になりました」とかいふコメントをされ

るが、これは本当である。

第二に、一般のマラソン大会では、エイドステーション(給水所)で水、スポーツドリンクはもちろん食べ物も提供され、それがまたおいしいのである。前述の和倉マラソンでは28km地点で能登万葉の里マラソン井(略して能登マ井)なるものが提供される。これは、小さめの発泡スチロールの井にご飯少量と(貝の)カキが2つのついで、そこにタレをかけてあるだけの極めてシンプルなものだが、カキとタレの組み合わせが絶妙で、これを食べることを目的に和倉マラソンに参加するランナもいるくらいである。

第三に、ビールと食事がいっぱい。レース後はもちろんだが、通常の1時間程度の練習後でも十分においしいし、いくら飲んでも食べても太ることがないので、ビール好き、ごはん好きを自認している自分にとっては最高である。また、若いころは大食漢であったが、40歳を超えて急に食が細くなり、自分も歳をとったものだ、と自嘲気味に感じていたが、走ることによって一気に食欲も回復し、若さがよみがえったような感があつた。走ることのすばらしさ、楽しさに、40代半ばでやっと気付いた自分であるが、実のところ事情があつてここ1年は休足中であり、体重

も再び増加傾向を示している。ただ、生きがいともなったマラソンである。そう簡単にはあきらめるつもりはなく、必ず復活する、という強い気持ちをもって、この原稿を終えようと思う。

フルマラソンを完走すると人生が変わる、とも言われている。さあ、皆さんもチャレンジしてみてもいい。

青の都

「サマルカンド」を訪れて シルクロードの国・ ウズベキスタン訪問ー

池田 茂雄

(平7年卒・九州支部)

アジア・中東の文化に魅せられ、これまで、トルコ、ウズベキスタン、インド、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナム、インドネシア、中国、台湾、韓国を旅行してきました。

最初の頃は、主に家族と旅行しており、ツアー旅行に参加するところが多かったのですが、遺跡好きの私にとって、訪問先や訪問時間に制約があるツアー旅行では満足できなくなり、個人旅行をするところが多くなりました。また、子どもたちは、成長するにつれ、私の趣味に付き合ってくれなくなり、最近では一人旅が多くなりました。

近年に行った旅で、特に印象に残っているのは、ウズベキスタンの旅とベトナム・ラオス・タイ横断の旅です。旅行後には、旅行記(冊子と電子データ)を作成して、旅行の余韻を楽しんでいます。もともとは旅行の体験が子どもたちの記憶に残るように始めた旅行記作成でしたが、今ではダイジェスト版を旅行ガイド本「地球の歩き方」のホームページ「旅スケ」に投稿するまでになり、ベトナムの旅はガイド本「地球の歩き方」ベトナム」に、旅行例として紹介されました。今回の会報では、ウズベキスタンの旅について寄稿します。

永年訪れたかった国の一つが、シルクロードがあった国・ウズベキスタンです。シルクロードの国々では、13世紀初めにモンゴル帝国のチンギス・ハーンの中央アジア・イラン・東ヨーロッパを制圧した時に遺構が徹底的に破壊されました。現在のウズベキスタンの地域でも、サマルカンドやブハラなどの街は壊滅的な打撃を受けましたが、14世紀末に繁栄したサマルカンドなど、複数の街が再興し、繁栄した時代の遺構が残っており、5つの街の遺構が世界遺産として登録されています。

ウズベキスタンは、中央アジアに位置する旧ソビエト連邦の共和

国です。主な民族はウズベク人、言語はウズベク語です。ウズベキスタンでは、10世紀にトルコ系のカラ・ハーン朝が支配して以来、イスラム教が信仰されていますが、トルコとイスラムの戒律に厳格でなく、お酒も普通に飲まれています。農業国であるウズベキスタンは、おいしい食べ物やお酒が豊富にあり、ワイン党や私のようなビール党に適した国です。ピラフの語源となったピロフは名物料理で、滞在中何度も食べました。

【ウズベキスタン入国】

平成27年8月下旬に、7泊9日でウズベキスタンを訪問しました。

福岡から韓国・仁川乗継ぎの大韓航空機でウズベキスタンの首都タシケントに向かいました。入国には事前にビザ取得が必要ですが、入国手続きは旧共産圏の国にしては思いのほか時間はかかりませんでした。1日目はタシケントのホテルで宿泊するため、入国後タシケントでタシケントの中心部に移動しました。タクシーで1000ドルを両替したところ、5,000スルクズを受け取りました。ウズベキスタンでは、過去インフレが激しかったこともあり、今でも自国通貨が信用されていないためドル信仰が強く、公定レート(銀行での両替)ではなく、ほとんどは実

勢レート(市場での闇レート)で両替されており、両レートの差は2倍もあります。首都以外では、5,000スルクズ札があまり流通しておらず、1000ドルが1,000スルクズ札400枚になったことでもあります。料理2品とビール一杯で20,000〜40,000スルクズ(実勢レートで約500〜1,000円)の国なので、旅行中は財布に入らない量の札束をバッグに入れて持ち歩かねばなりません。日本円で両替できるところがなく、手持ちのドルがなくなったら、銀行に行きクレジットカード(VISA)でキャッシングしました。

【世界遺産イチャン・カラ観光】

2日目は、午前中にタシケント市内を観光して、午後からタシケント国際空港からウズベキスタン西部にあるウルゲンチ空港に飛行機で移動しました。本当は鉄道で移動したかったのですが、時間の都合上この日だけは飛行機移動となりました。ウルゲンチ駅で、4日目以降の鉄道チケットを購入し、世界遺産の街ヒヴァにタクシーで向かいました。世界遺産イチャン・カラは城壁に囲われた市街地で、中央・西アジアで無傷の状態を保たれている唯一の内城です。城内には、城郭、神学校(マドラサ)、寺院(モスク)、霊廟、

塔（ミナレット）があり、独特の建築構造、壁面に施された青を基調とした装飾はとても美しかったです。ビヴァには2泊して、イチヤン・カラの建造物を堪能しました。



イチャン・カラと筆者

【夜行列車での移動】

4日目は、昼にヒヴァからウルゲンチ駅に行き、夕方にウズベキスタン中央部にあるサマルカンドに向かう夜行列車に乗りました。740km、14時間の旅でした。ウズベキスタンの夜行列車の雰囲気を経験するため、2等列車に乗りました。1ブロックが2段の簡易ベッド×3となる座席で、空調はありませんでした。ウズベキスタンでは日本人が珍しいこともあり、数人のウズベク人に声をかけられ、日本のことを聞かれたり、食事とお酒（ウォッカ）を頂いたりしました。道中は延々と砂漠が続き、そのなかでの夕日はとても綺麗でした。ウズベキスタンの鉄道技術は高いと言われ、列車の揺れは小さく快適な鉄道の旅でした。

【世界遺産サマルカンド観光】

5日目は、早朝に「青の都」と呼ばれるサマルカンドに着き、まず、14世紀末に「ティムール帝国」を建国したティムール・アミールが眠るグリ・アミール廟を見物しました。目を引く青いドーム状の建物、内部は黄金や紫の装飾が施されています。装飾は、「サマルカンド・ブルー」と呼ばれる綺麗な青系の色のタイルを使ったものです。グリ・アミール廟は、インドのタージ・マハルなどのムガル建築に影響を与えたと言われており、非常に美しく荘厳な建物でした。

次に、サマルカンドで一番有名な建物があるレギスタン広場を訪れました。しかし、残念なことに、2年に一度開催される国際音楽祭（招待客しか入場できない）のため、荘厳な装飾のあるウルグベク・マドラサ、ティラカリ・マドラサ、シエルドル・マドラサの内部に入るどころか、近づくことすら出来ませんでした。遠くから外観を見るのみでした。シエルドル・マドラサには、小鹿を追うライオンが、背中に人の顔をした太陽を背負っている絵が描かれています。偶像崇拜を否定するイスラム教義に反する絵です。無謀なことができたティムール帝国の強大さを感じました。

その後、ビビハニムモスク・廟、シャーヒ・ズインダ廟群、ハズラティ・ヒズル・モスクを見物しました。どれも美しい建造物でした。特にティムールの妻や親族、部下たちを祀っているシャーヒ・ズインダ廟群は、様々なモザイク画の建物が数多くあり、「サマルカンド・ブルー」のタイルの装飾を十分堪能できました。



シエルドル・マドラサ

【世界遺産ブハラ観光】

6日目は、昼にサマルカンド駅からブハラ（カガン駅）に鉄道で移動しました。250km、3時間の旅でした。アストラ・ハーン朝が16世紀末に建国した「ブハラ・ハーン国」が繁栄した街です。6、7日目は、ナディール・ディヴァンベギ・マドラサ、チョル・ミナル、カラーン・ミナレット、アルク城、バラハウズ・モスクなどを見物しました。

どを見物しました。

ナディール・ディヴァンベギ・マドラサには、二羽の鳳凰が白いシカを掴んで、顔のある太陽に向かって飛んでいる絵が描かれています。ブハラでも、イスラム教義に反した絵が描かれているのは興味深いです。チョル・ミナルは、小さな建物には釣り合わない4本の太目のミナレットがある、おとぎの国のお城のようでした。カラーン・ミナレットは、高さ約46の塔でブハラのシンボルです。12世紀初めに建設されましたが、チングス・ハーンに破壊されなかった建物の一つです。アルク城は、紀元前4世紀頃から存在していた、歴代のブハラ・ハーンの居城で、バラハウズ・モスクは、ブハラ・ハーン専用のモスクです。バラハウズ・モスクは、彫刻された高さ12mのクルミの木の本柱や赤、緑、黄色などカラフルに塗り上げられた壁や天井が非常に美しい建物でした。

【ウズベキスタンから帰国】

8日目は、午前中にブハラからタシケントに鉄道で移動しました。620km、6時間半の旅でした。タシケントでは、ロシア正教の聖ウスペンスキー大聖堂、ウズベキスタン歴史博物館、ナヴォイ・オペラ・バレエ劇場（シペリアで抑留された日本兵が建築した建物）などを見物しました。夕方、タシケント国際空港に移動し、夜の便で韓国・仁川国際空港に出発し、9日目の夜に福岡空港に着きました。

ウズベキスタンでは、興味深い歴史や文化、ウズベク人の優しさに触れられ、おいしい食事とお酒を味わうことができ、とても楽しい旅ができました。残念だったのは、サマルカンドのレギスタン広場の建物を間近で見られなかったことです。レギスタン広場訪問は、定年後の楽しみにしたいと思っています。



ブハラのシンボル カラーン・ミナレット

房総半島 絶景の旅

重田 一樹

(昭62年卒)



紅葉の季節も終わり、東京都心で観測史上初の積雪となったこの11月。そろそろ年賀状の準備を始めようと思い、この一年間の写真を見直していました。我が家の年賀状は、その年に撮った写真の中から、印象に残った1、2枚を選び、家族一人一人の近況を書き加えるスタイルです。これまでに作成した年賀状を並べてみると、その年の出来事が思い出されます。今年も年賀状にふさわしい家族写真のネタはないかと探している、と、日帰りバス旅行のチラシが目にとまりました。

「一生に一度は目にしたい絶景!!」

強気な広告だなあと行って行き先を調べてみると、神奈川から日帰りで行ける場所であり、最近TVやSNSで話題になった絶景スポットを巡る旅とのこと。長年、関東地方に住んでいます、房総

半島にはほとんど行く機会がなかったこともあり、さっそく夫婦で申し込みました。この旅では絶景5か所をまわりましたが、ここではおすすめの3か所を紹介したいと思います。

最初に紹介するのは、千葉県君津市の清水溪流公園にある濃溝(のうみぞ)の滝です。添乗員さんの話によると、350年ほど前に川の流れを変える目的で造られた人工の洞窟があり、朝早ければ、洞窟に差し込む光が水に反射して、驚くほど美しい景色がみられるとのこと。そんな話を聞きながら、駐車場から自然あふれる川沿いの遊歩道を5分ほど歩いていくと、その絶景が現れました。写真で見るとわかりませんが、洞窟の穴から向こう側に広がる景色を望むことができ、そこから流れる川の水は、別世界から洞窟を通して流れ出ているような不思議な感覚になります。写真を撮何枚も撮ったり、周辺の風景を楽しみながら、1時間ほどのんびり過ごしてバスに戻りました。我々が現地に着いた11時には、多くの観光客で賑わっていました。多くの観光客で賑わっていました。朝であれば、秘境の雰囲気をもっと楽しめたのではないかと思います。



濃溝(のうみぞ)の滝

濃溝の滝を出発し、次に向かったのは千葉県富津市の鋸(のこぎり)山です。良質な石が採れることから盛んに採石が行われ、鋸の歯のような険しい山の形となり、昔は東京湾に入る船の目印ともなっていたそうです。鋸山日本寺では、高さ31メートルの大仏や、見上げるような百尺観音などを参拝することもできますが、今回は、山頂付近にある「地獄のぞき」が目的です。駐車場から15分ほど階段を上って山頂を目指しました。しばらく登ったところに東京湾を一望できる展望台があり、「地獄のぞき」のある絶壁も見えます。突き出た岩の下には何もなく、そこから見える絶景はどんなだろうとワクワクしながら先に進むと、「地獄のぞき」の順番待ちの長い

行列が見えてきました。その日は久しぶりの快晴で、普段よりも観光客が多かったようです。行列に並んで待っていると、バスの発車時刻が迫り、とうとう「時間がないのでここで引き返してください」と非情な言葉を添乗員さんが伝えにきました。残念ながらその日はそのまま引き返しましたが、パンフレットによると、地獄のぞきでは、絶壁の上に突き出した場所から約百メートル下を見下ろすことができ、「まるで空に立っている感覚」が味わえるとのことでした。次回はゆっくり時間をとってリベンジしようと思います。



鋸山の展望台から見た「地獄のぞき」

最後の絶景は、東京湾に面した千葉県木更津市の江川海岸です。東京湾アクアラインの千葉県側の少し南にあり、潮干狩りでも有名

なスポットとのこと。一行が到着したのは日没直後で、海岸に近づく、夕陽を撮影するための三脚がたくさん立っているのが見えます。海岸でまず目にしたのは、電柱が海に向かって並んでいるという不思議な光景でした。「海原電線」。元々はあさりの密猟監視用の小屋に電気を送るために立てられたもので、現在は使用していない電柱だそうです。遠くには富士山も見え、夕陽が沈んで薄暗くなり、空がオレンジ色から濃い青に変わっていく。そういう幻想的な風景の変化を楽しむことができました。今回は見ることができませんでした。波がなければ電柱が海面に映り込み、日本のユニークな風景が見えるそうです。



江川海岸 海原電線

今回の旅では、ここで紹介した以外にもローカル列車に乗ったり、手漕ぎ舟で島に渡ったりと、様々な「絶景!」が盛りこまれていて、房総半島の旅を思う存分楽しむことができました。たまには、バス旅行もいいものです。ただ、各スポットをのんびり堪能するには滞在時間が短かったため、次回は、子供たちも誘って、余裕をもって絶景を楽しみたいと思います。皆さんも身近な絶景を探してみてはいかがでしょうか。

同窓会だより

昭和33年卒

洛友会同窓会

紅葉素晴らしい11月16、17日エクスヴ京都八瀬離宮にて同窓会を行いました。

昨年は姫路城、スプリングエイト並びに太陽公園などを訪れ大いに盛り上がりましたが、帰りのバスでの別れ際、突然当日の幹事の河村君から私に来年はこの同窓会も全員が80歳を超えるので最後の同窓会にしたい。ついては是非京都でやりたいと思うので幹事をお願いしたいと眩かれ引き受けざるを得なくなりました。

秋の京都は観光シーズンで宿が

とり難いと思い昨年の秋に11月16日を予約しました。最近の京都の紅葉の見どころは11月末〜12月初旬になっていましたが、今年は11月の初めに寒い日がありちょうど11月中旬が紅葉真っ盛りとなり天気が良くラッキーでした。



全員が80歳を超え、幹事もしんどかろうと成るべく負担がからないように配慮し、11月16日の夕方にエクスヴ京都に集まり、宴会をやつて翌朝17日朝食後に解散し各自思い出深い京都近辺を散策すべしと京都の各所地図、バス路線図並びに京都大学のパンフレットを各人に渡しました。今回は直前に都合が悪くなった人が数人ありましたがご夫人同伴一組を合わせ21名が参加しました。

宴会では例年各自の近況報告を

行っていました。この年になると殆どの人が病気の話になるので、病気以外で何か特に話したいという人に話をお願いしました。

喜利君から紙の模型飛行機の話が出て、紙飛行機を子供たちに作らせる、コンピューターを使って切り出した紙部品で格好良い紙飛行機を作り、その「工作のつよさ」を競い合う。これにより子供たちのチャレンジ精神を涵養するとともにモノヅクリの楽しさなどを学ばせる、京都市教委主催の行事に採用されている、というような興味ある話がありました。

何時も宴会には欠かせないエンターテイナーの小山君が当日朝から体調を崩し欠席されたのでその穴埋めが大変でしたが町田(昌)君のシンセサイザーによる伴奏により、昔の古い歌をみんなで合唱し宴を終りました。そのあと幹事の部屋で二次会をやり大いに喋り、盛り上がりましたが、話が弾むほどにはアルコールの消費が少なく、皆それぞれに酒が弱くなつたと嘆いていました。

翌日は各自自由に紅葉の美しい京都の名所や京都大学、比叡山などに出かけ、幸い晴天に恵まれ皆さんにはそれなりに楽しんで頂いたようです。

今回は全員が80歳以上という節目で最後の同窓会にしようと思っ

ていたのですが、再来年(2018年)は卒業60周年というこれも大きな節目となり、これを記念して何とか京都でやりたい、オレが面倒をみてやる、との声も上がっています。期待しましょう。



西村 寅雄 記

昭和35年卒

電気・電子同窓会報告

今般昭和35年卒電気・電子同窓会の会合を関東の有志の準備、運営により紅葉の季節に修善寺温泉のホテル桂川で行った。

今回の会合の参加者は九州在住2名、中国地方在住1名、中部地方在住2名、関西在住9名、関東在住17名で計31名である。またこれに加えて参加者の夫人3名の参

加を得た。以下11月30日の同窓会会合および12月1日の修善寺散策行事について順を追って述べる。

先ず会合の開会に先立ち会合開催時間中に環境映像として映写する三木亮爾君の美しい風景写真について同君より映像とともに説明があった。これらの中で徒歩でしかアクセスできない冬の上高地大正池や冬季閉鎖直前の尾瀬ヶ原の映像は神秘的で素晴らしいものであった。三木君は仕事を卒業後11年前よりプロカメラマンが指導するキャンフोटサークル湘南に参加し、同サークルが毎年開催する藤沢駅前会館ギャラリーでの展覧会に出展しているそうである。

6時ごろより会合を開始した。我々の大部分が本年数えでめでたく傘寿を迎えることから会合名は「35洛友会傘寿祝宴」とした。大広間に膳を並べて行つという昔懐かしい形式の宴会である。開会後すぐに各人の現状の報告を一人2分程度で行った。以下はその報告のまとめである。

80代近くなると健康とロコモーション(移動)の容易性に関心が向かう。ロコモーションに関して、ウォーキング、スキー、登山、社交ダンスのどれかを積極的にに行っていると発言した人は7名であった。そのうちの一人Y君は最近悪沢岳、赤石岳、尾瀬燧ヶ岳、尾瀬

至仏山に登り、笠ヶ岳ではやや疲れたという程の元気さである。筆者は新宿駅の階段を昇降できると自慢している位であるので相当な能力差である。また15年前に奥様を亡くした関西在住のK君は一人で2府4県のダンスパーティーに参加しており、パーティーの最初は胡散臭がられるがリードが上手なので女性にもてるそうである。北九州在住のN君は一日10キロを歩くスーパーマンである。

健康に関して述べると31名中何らかの癌の経験者が5名、脳梗塞経験者が2名あり何れも思ったより少ない。この他良性腫瘍1名、脊柱管狭窄2名、難聴2名、腎不全1名、リウマチ1名、大腸横方向拡張症1名、無呼吸症候群1名であり会合参加者の半数が何らかの不具合を持つようである。

社会的活動について述べる。大組織で指導的な地位に就いていた人で今も業界団体等で活動している人は参加者の中に何人かいるが、自分で小さい組織を運営している人もいる。A君は医療機器の輸入を行う従業員10名の小さい会社を運営しており医工連携に貢献している。また前記N君と別のN君は小さなメーカーの経営者の一人で、IEEEとヨーロッパの合同主催の国際会議で論文賞をもったり、宮内庁主催の園遊会に

招かれたりして活躍している。またS君は大学の教授を続ける傍ら中小企業診断塾を運営している。

パートタイム業務としてまた別のN君は国内データベース向けの技術文献の抄訳をしており、M君は米国電気学会論文抄訳を多い時には月に100件ほど行っている。さらにH君は発電機についての英文の著作をJohn Wiley社より出版した。また以前ドイツに駐在していたT君はバイエルン地方とナポレオンの関係を示した分厚いドイツ語の本を和訳し一般の書店から刊行した。

次に文化的な趣味について述べる。昔から電気屋は音楽に関心のある人が多い。31名中ビオラ、バイオリン、アコーディオン、チェロを弾く人がそれぞれ1名ずつ居る。そのうちのチェロを弾くT君は東京オペラシティの小ホールであるリサイタルホールで年に1度弦楽四重奏を披露している。囲碁とラテン音楽の好きなI君はラテンアメリカには27回行き、そのうち囲碁交流を6〜7回行った。また木工が得意なB君は木馬を作り保育園の協会に毎年5つ程度届けている。協会から何時までも長生きしてくださいといわれたそうである。その真意を測りかねている。さてこの会合に参加されているご夫人の意見について示す。M夫

人は58年前に大学生どうして知り合い54年前に結婚したそうで、それ以後心配性の自分を夫が励ましてくれたという話を聞かせてくれた。I夫人は共通の話題は介護のこと、自分は夫に介護してもらいたいという、夫の家事能力の高さを示す話をされた。何れの話も男性参加者に反省の機会を与えた。



この会合の知らせに欠席の返事をくれたことによって11人の最近の消息が判明した。このうちの5名の体調が万全でないようであった。

以上が昭和35年卒電気・電子同窓会の主会合での参加者の近況報告のまとめである。主会合は9時頃終了したが主会合の後にコー

ヒーグループ、スナックグループ、夫人グループに分かれて二次会を行った。コーヒーグループ9名は下戸もしくは医学的に酒を禁じられている人々で内外の情勢について語り合い、スナックグループ約20名は約10人ずつ2組に分かれてアルコール類を飲みながら熱い議論を戦わせた。また夫人たち3名は部屋で情報交換をしたと思われる。

以上が11月30日(水)の状況であるが翌12月1日(木)の朝9時30分に記念撮影を行った後次回の幹事が挨拶を行った。同窓会会合は関西、関東で交互に開催し開催地の人が幹事を務めることになっている。今回は関西で開催することとし所君を中心に、藤君、三浦君、藤田君で幹事を担当し2年後に開催することになった。今回合合と前回会合の間隔は3年であるので間隔を短くしたことになる。なお前々回までは5年に1回開いていた。

再会を約しての全体解散後17名の参加を得て修善寺温泉と「修善寺自然公園もみじ林」散策を行い、4名の参加を得て修善寺温泉のみの散策を行った。以下修善寺温泉と「修善寺自然公園もみじ林」散策グループの行程を示す。修善寺温泉のみ散策グループの行程は前記「もみじ林」グループの行程前

半と同一である。

全体解散前の記念撮影時は降っていた小雨も、我々の日頃の行いが良いのか10時近い出発時には晴れ上がり前夜来の雨のため適当な湿度もあり最高の条件であった。

「もみじ林」グループは宿を出て桂川を「みゆき橋」で北岸に至り、西方へ少し行き「日枝神社」へ行った。桂川にかかる橋は何れも赤く塗られており風情がある。日枝神社社殿の右奥には根回り5.5m高さ25mの「一位檜(いちいかし)」の太木があり、また2つの太木の根元が重なった樹齢800年の「子宝の杉」がある。何れの木も圧倒的な存在感がある。桂川を「渡月橋」で南岸に渡り「筥湯(はこゆ)」という銭湯の前を通り西方に向かい「虎溪橋」で北岸に渡りさらに西方に向かい修善寺へ至った。紅葉は真っ盛りで日の光を受けて真っ赤に輝いていた。

修善寺は807年弘法大師が開いたとされ真言宗、臨済宗、曹洞宗と宗派が変遷してきた。修善寺は地名の修善寺と一字違いの名称を持つ。ここの御手洗の水は源泉掛け流しの温泉である。北岸川岸へ戻り川の中にあり弘法大師が湧出させたといわれる「独鈷(どっこ)の湯」という屋根で覆われただけの屋外温泉を上から眺めたのち

「桂橋」で南岸へ渡りなおし竹林の小道を西方に少し進み「ギャラリーしゅぜんじ回廊」に至った。これは野外の写真展示場で修善寺の美しい写真が展示されている。その後桂川の南岸を東方向に戻り少し南に登ったところに「指月殿」という建物がある。

「指月殿（しげつでん）」は北条政子がわが子である2代將軍源頼家の菩提所として建立したものであり伊豆半島最古の建物である。この中には高さ203cmの鎌倉時代に作られた黄金色の釈迦如来坐像がある。これは手に蓮の花を持つ珍しい形式の釈迦如来で静岡県指定文化財である。我々が知っているコンデンサーの指月電機は「しづき」と読み指月殿の読みと違っている。次に指月殿背後の源頼家の墓を見て修善寺温泉の散策を終わった。修善寺温泉の名所は全体が桂川を中心とした1つの回遊式庭園の形にまとまっている。

次に東方に引き返し「みゆき橋」の近くのバス停に戻り戸田方面行きのバスで「もみじ林バス停」で下車し「修善寺自然公園もみじ林」を見学した。もみじ祭り期間中なので入り口に売店が3軒出ていた。ここは1万平方メートルの敷地に約1000本のもみじの木がある。修善寺温泉より高いところにあるので散ったもみじが多かつた。その後富士見台という展望台まで登った。晴れた日は駿河湾越しに富士山が見えるようであるがあいにく雲に隠れて見えなかった。次に「松葉茶屋」というレストランで各人「とろろそば」や「頼朝釜飯」を食べた後、解散となった。その後参加者はバスで修善寺駅を経て帰路についた。

最後になったが先ず、脳梗塞を発症し8日間の入院の後リハビリ中に平然として本会合の準備の中心を担った古澤君に感謝申し上げる。また準備運営の仕事を分担して行われた大成、西田、仁田、三木、角の各氏に感謝申し上げる。

(文責 楠 博史)

昭和39年学部卒業生 卒後52・5年同窓会開催

昭和39年卒業生は平成28年11月16日(木)KKR熱海ホテルで卒後52・5周年同窓会を開催。もともと5年毎に開いていたが、還暦後その中間に閑幹事で開催している。出席者29名。30名を割ったのはここ10年間で初めて。前回は51名の77%だから激減。3月までに全員後期高齢者になる年頃だからやはり老朽劣化によるものだろう。定刻酒井君の司会で開宴。上記参加状況に鑑み「頭だけでなく、筋肉をつけて老化を防ごう！」と

の挨拶。この会には必ずゴルフ会と散策会が付いているから前記目的にならなっている訳だ。全員2分間スピーチ、普通病気の話はしないものだが、如何に克服したか、あるいはどう共存しているかなど傾聴に値するものがあつた。殆どが泊まりで貸し切ったカラオケルームで全員の2次会。スペースも広く、皆歌い放題、話し放題。20名以上の歌手が登場したのではなからうか。初めての歌手も多々。全員と話できた会は初めてでなかったかな。次回2019年まで頑張ろうという締めでキッチリ10時間閉会。



翌17日 ゴルフ組は朝6時ホテル出発。15名の参加。このゴルフ会「39京電会ゴルフ」と称して1999年以来春秋2回開催。小

島君がリーダー。今回は41回目で平均参加者15・6名と定着しているのはスゴイ。今回は函南GCで素晴らしい天気恵まれ、富士山を仰ぎながら楽しんだ。山中君の優勝！メンバーも固定されているので独自のハンディ方式を採用し、誰にも優勝の可能性を与えている。今後は関東/関西中間の掛川を中心に実施することとした。

散策会は、ハイキング愛好者の集まりで小澤リーダーの下2011年箱根総会以月1ペースで開催、今回で第45回、延べ376名の参加と定着している。まず総会当日、伊豆箱根鉄道大仁駅から9名で益山寺から葛城山、韭山反射炉跡見学の予定が、葛城山近くで道を間違えミカン畑近くの山道を滑りながら這い上がった。散策というより山のほりて素人には少々きつかった。時間を食ひ韭山へは行けなかった。総会翌日は8名の参加。十国峠までバスで行き、東光寺までは散策。岩戸山近くの分岐で昨日の様な急斜面を避けるべく緩やかな道を選択した積りが大間違。下り坂が続くやがてススキや笹やで前が見通せず、足元も良く見えない獣道みたいな怪、何とか頂上にたどり着く。「三角點」の石碑があつた。帰路は脚を捻挫した者もいたので予定変更し、近くの楽そうな道を選んだつもりが里

近くで迷った。しかしバス停についてみると意外と早い時刻で、熱海駅前空いている飲み屋を探して反省会。「卒後60周年までは総会をやるうや」というこの場の結論。しんどかったが新機軸を盛り込んだ実に楽しい会合であった。

(留岡 寛 記)

支部だより

九州支部総会報告

平成28年6月3日(金)、福岡市天神の西鉄ソラリアホテルにて、平成28年度九州支部総会を開催しました。本部から松田先生をお迎えし、九州支部からは主に福岡在住の会員16名が出席しました。

当日はまず総会に先立ち、当支部恒例のカクテルパーティーを今年も催しました。このパーティーは、総会開始30分程前から三々五々集まった出席者が、グラスを片手に歓談するというものです。パーティー開始時には出席予定者全員が集まり、総会開始前から早くも盛り上がっていました。

総会は深堀支部長の挨拶で始まり、昨年度は予定通りに昼食会、懇親会を行い盛況だったことなど

について述べられました。

引き続き、本部の松田先生からご挨拶をいただき、ご用意いただいた資料を用いて、京都大学や洛友会の現況などについてご紹介を頂きました。今年度は、久しぶりの現役の先生で、医学系出身の先生の参加であり、出席者から盛んに質問が出て、大いに盛り上がりました。その後、能見幹事、池田会計幹事から平成27年度活動実績・会計の報告及び平成28年度活動計画の説明を行い、満場一致で承認されました。

懇親会は、増岡先輩（昭和21年卒）の乾杯の音頭で始まり、参加者全員お酒を酌み交わしながら、終始和やかな雰囲気、昔話や近況報告などに花を咲かせました。楽しいひとときもあっという間に過ぎ、深堀支部長の音頭により懇親会を締めくくり、最後に全員で記念撮影をしてお開きとなりました。

池田茂雄（平7年卒）記

関西支部家族見学会報告

関西支部では、平成28年10月22日（土）に、恒例の家族見学会を開催しました。

当日は雲が多く午後からは雨が心配されましたが、見学・散策中は過ごしやすい気候となりました。

た。

今回の家族見学会は、合計60名の方にご参加いただき、滋賀県甲賀市信楽町の「京都大学 生存圏研究所 信楽MU観測所」を見学したのち、滋賀県近江八幡市で水郷巡りと市街散策を楽しみました。



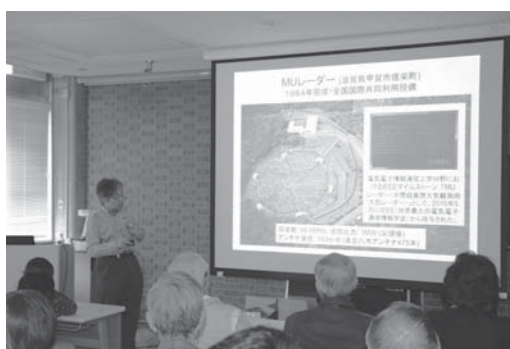
JR新大阪駅に集合後、バス2台に乗り込み、最初に信楽MU観測所へと向かいました。観測所の近くは大型バスの通行ができないため、マイクロバスに乗り換えて観測所へ向かいました。観測所では、2班に分かれて見学を行いました。

した。山本衛先生（S58年卒）からは、IEEEマイルストーンに認定（2014年11月）されたMUレーダーの開発の歴史や大気レーダー観測の意義、MUレーダーから発展した新たな研究テーマ等についてわかりやすく説明いただきました。その後、甲子園球場と同じ広さに設置されたアンテナ群を間近に拝見し、観測所内で操作盤や制御装置等を見学させていただきました。30年以上にわたって貴重な観測データを生み出す装置に、一同興味深く拝見させていただきました。

昼食は信楽町の「信楽陶苑たぬき村」にて、山本先生と橋口浩之先生（H4年卒）にもご参加いただき、大いに歓談しました。



午後からは引き続きバスに乗り、水郷巡りへと向かいました。8人ずつ手漕ぎ船に分乗し、船頭さんから重要な文化的景観の第1号に選定された近江八幡の水郷の歴史と豊かな自然について、楽しくガイドしていただきました。



その後、近江八幡市街をボランティアガイドの方の案内で散策したのち、一同帰途につきしました。午後からの行程にあまり余裕がなく、交通事情の影響もあり市街散策の時間が短くなったことが心残りでしたが、充実した一日となりました。

中井敦子（H13年卒）記



訃報

昭24	浜田 浩	28・10・1
昭29	大久保 宏	28・10・13
昭39	細見 史雄	28・6・2
昭41	森田 肇	28・8
昭49	松山 隆司	28・12・12

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。